

あなたの大切な女性をナンパして  
数時間後にセックスさせます

犬文庫 019

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等はありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

## 第一話 田坂藍子さん三十二歳

三時間以内に浮気しなかったら

旦那さんに賞金三百万円

「ふんふんふふ〜ん♪」

目の前のキッチンで、エプロン姿の女性が食事の準備をしている。私の妻の、藍子だ。

「るんるんるん〜ん♪」

藍子は終始鼻歌交じりで大変ご機嫌の様子。黒髪ロングヘアで清楚系の妻は、見た目の印象通りに三步下がって夫に尽くすばかりでなく、こういった無防備な茶目っ気も兼ね備えている。

控え目で可愛らしくて穏やかで、我ながら非の打ちどころのない最高の妻だと思う。

「るんるん〜ん♪…あは♪」

「……」

だからこそ、そんな妻の姿を見ているだけで  
締めつけられるような罪悪感に苛まれる。

私は個人的な都合で、この最愛の妻を危険に  
陥れようとしているのだから……。

※※※

「…本当に…そんな大金を…ただけるんで  
すか？」

一週間前のこと。私は繁華街の怪しげな雑居  
ビルの一室にいた。そしてそこで聞かされた話  
は、この場所以上に怪しげで、俄かには信じ難  
いものだった。

「ええ。賞金は確実にお支払いします。勿論、  
奥様が…浮気されなければ、の話ですが」

ソファ―に腰掛ける私の傍らに立つ、黒いスーツ姿の背の高い男が言った。三十歳くらいで、藤原と名乗った。目鼻立ちの整った男前であるが、そこはかたなく漂う不穏な空気は隠せない。私達とは違う、夜の世界の、或いはもっと深い闇の世界の住人であることは容易に想像された。

「…奥様が浮気をされなければ、速やかに賞金をお支払いし、全てを闇に葬り、旦那様がこの企画に参加した事実自体を消去致します。ただし、万が一奥様が浮気をされてしまった場合は……先程説明させていただいた通りです。それを承諾していただきますことが、この企画の参加条件となっております」

「……………」

夫婦で食事する約束を私にドタキャンされた妻は、街で男にナンパされる。制限時間以内に妻が所定の部屋に連れ込まなければ、私は

賞金をもらえる。反対に連れ込まれてしまった場合には、賞金は一切出ず、その後その部屋で行われることの全てが隠し撮りで撮影され、後日ネットで公開される。しかもその部屋の鏡はマジックミラーになっており、隣室に控えた夫である私が、妻の浮気現場をリアルタイムで突きつけられるのだという。そしてその模様も撮影され、私の姿も妻同様モザイクなしでネットに晒されてしまう…。

「……ゴクッ」

アダルトビデオで似たようなものがあるが、あれらは無論ヤラセだ。だがこの企画は、ガチでそれをやってしまうということだった。なにも知らずに罠にハマってしまう女性は少なくないらしく、公開された動画の広告収入で破格の賞金を賄っているらしい。その賞金に釣られて、新たな志願者が後を絶たない。そんな風にして、信じられないことだが、この異形のビ

ビジネスは現実に成り立っているらしいのだっ  
た…。

「……………」

かくいう私も、賞金に釣られてこの非道な企  
画に手を出そうとしている愚か者の一人だっ  
た。どうしても、金が必要だった。全て私が悪  
いのだ。ギャンブルで、多額の借金を背負って  
しまった。妻にバレたくない。妻に迷惑をかけ  
たくない。その一心で金のアテを必死に探して  
いた。そしてネットで辿り着いたのがこのいか  
がわしい企画だった。迷いながらも応募して、  
事務所を訪れた。

妻のことを思っただけで焦っていたはずだった。け  
れど私は、その妻をこれ以上ないほど残忍な形  
で騙し、利用しようとしていた…。

「…さあ、旦那様、最終確認です。どうなされ  
ますか？当方の企画に……参加なされます  
か？」

「……ゴクリ」

※※※

「はぁーい♪お待たせ致しました、あなた」

妻が嬉しそうに料理を並べてくれる。和食だ。焼き魚と豚汁と卵焼き。そしてほうれん草のごま和え。妻の料理はレパートリーに富み、四十を越えた私の健康も充分に考慮してくれている…。

「……………」

私は妻をじつと見つめてしまう。

「へ？…どうしたんですかあなた？そんなにじつと見て？…きやつ！もうやだ！そんな見つめないでくださいよ！」

妻は露骨に頬を赤らめ視線を逸らした。はに

かみ屋で純朴で、勿論男擦れなどしていない。  
そんな妻を、私は生贄に差し出してしまった。  
私は、承諾してしまったのだった…。

「いや…なんでもないんだ…ごめん」

「そうですか？それじゃあ冷めない内に早く  
食べてください…うふふ♪」

「うん…いただきます…」

胸の痛みに耐えながら箸を運んだ。せつかく  
妻が作ってくれた料理の味も、よくわからな  
かった。

私が企画への参加を決めたのは、妻が百パー  
セント浮気をしないと確信しているからだっ  
た。妻が私以外の男についていくなんてありえ  
ない。絶対にない。それはわかりきっている。  
だから確実に賞金は手に入る。目的は間違いな  
く達成される。

「……………」

だが、心苦しかった。愛する妻を騙すのだ。



利用するのだ。嘘をつくのだ。暴力行為などはないと確約をもらったが、ナンパ男につきまとわれて、不快な思いをするだろう。心の傷になっ  
てしまう可能性もゼロとは言い切れない。

（ごめん…藍子……本当にごめん…）

心の中で謝罪が空しく響いた。私にはその資格  
すらないのかもしれない…。

※※※

私達夫婦はベッドではなく床に布団を二枚  
並べて寝ている。布団に入った私は、すぐ隣で  
寝支度をしている妻に言った。

「なあ…藍子」

「ん？どうしたの、あなた？」

「うん…今度さ…いつになるかわかんないん

だけど、都合つけるから、外で食事でもしないか？それなりに、良い店で…混雑するから、平日の方がいいかな？」

「え？ホント？」

「うん…どうかな？」

「わあ！…嬉しい♪」

藍子はいきなり私の布団に飛び込み、抱きついてきた。

「わあ、こらこら」

「嬉しい…あなた…大好き♪」

「馬鹿…ちよつ…ちよつとやめろよ…」

子供のようにはしゃいでまとわりつく妻に、私は困惑する。そしてパジャマ越しの生々しい肉の感触に思わずドキリとしてしまう。

「だって…嬉しいんだもん♪今でもずう…つと恋人同士みたいで♪えへへ♪やつぱり私まだ、赤ちゃんはいいかな？このまましばらくは二人でいたい…はあ…あなた…大好き…大

好き…大好き…」

藍子は私の胸に顔を埋め、呪文のように唱える。私も同じ気持ちだ。だが決してそれを口には出せない。私は妻がこんなにも楽しみにしているデートをドタキャンすることを、もう知っているのだから…。

※※※

四方を黒いカーテンに囲まれた異様な部屋に私はいた。中央付近に無造作に置かれた椅子に腰かけている。部屋には小さなカメラがいくつか設置してあり、各方向から既に私の姿を撮影している。万が一（そんなことは絶対にありえないが）妻が間違いを犯した場合は、それらの映像も後日ネットに晒されるということだ。

例の企画の、当日を迎えていた…。

正式な契約を交わした日から、一月以上が経過していた。ここまで時間が必要だった主な理由は、妻の調査ということだった。私は求められるがまま、妻の細かい個人情報提出していた。それを元に妻を籠絡する方法が慎重に検討され、ナンパ師も選定される。執拗なほどの念の入れようだ。向こうにとつてはそれが勝負なのだから、時間がかかるのもわかった。だがいくらそんなことをしても無駄なのだ。妻がひっかかるわけがないのだから。

「旦那様…こちらが今回奥様をナンパする男性でございます…」

傍らに立つやはり黒スーツ姿の藤原が、手に持ったタブレットを提示する。動画が再生される。

現れた男は、どう鼻屑目に見ても、超がつくレベルのイケメンだった。二十代半ばくらいだ

ろうか、爽やか、柔和な印象で、黒髪でチャライ感じもしない。とても品の良い好青年といった感じだった。

だが、動画の中の男は…。

「どうも：はじめまして旦那さん。今回藍子ちゃんをナンパさせてもらうタカシっていいます。すみませんけど、遠慮なく奥さん食わせてもらっちゃいますんで。あは(笑)♪今日は確実にパコパコやりまくっちゃうんで、覚悟しててくださいね？なは♪それじゃあ、いってきまあゝゝす☆☆☆☆」

「!!!!」

男のあけすけな態度に、私は心臓を撥ねあがらせた。そして自分で播いた種とはいえ、烈火の如き怒りを禁じ得なかった。ふざけるなと思った。そして当たり前だが、こいつは妻のことをなにもわかっていない。どれだけイケメンだろうが、藍子は顔で男の価値を計るようなバカ

な女ではない。ナンパしてくる軽薄な男など、もうそれだけで門前払いなのだ。自信満々のこの男は藍子にすぎなく袖にされ、無惨に大恥をかくに違いなかった。

「それでは、こちらをご覧ください」

私の不快感など気にせず、淡々と藤原は進行していく。彼の合図で、部屋の隅にあるモニターに映像が浮かんた。繁華街の一角を、遠くから隠し撮りしている。リアルタイムの中継映像だ。カメラがやや左右に動く。やがて、街角に立つ一人の女性に照準が合わされる。

妻だった。私の妻の藍子が、モニターの中に立っていた。

三十二歳の妻には、やや少女趣味が過ぎる白地に花柄の長袖ワンピースと、落ち着いた色のシックなストール。お茶目な妻が、今日のデートのために張り切ってオシャレしてきたのが痛いほどわかり、胸が詰まる…。

「それでは旦那様：奥様に電話してください。  
先程打ち合わせた通りに：お願い致します」

「……ゴクリ」

私はスマホを取り出し妻に電話をかけた。私からの連絡を待ち侘びていたのか、モニター内の妻はすぐに電話を取った。間髪入れず、スマホから妻の音がする。

「もしもし、あなた？私もう着いてますよ？」

「藍子……ごめん」

私は、声を振り絞って言った。

「え……」

その声だけで、藍子の無念が伝わる。胸がじくじく痛む。続ける。

「……取引先の人達と……急に飲みに行くことになっちゃって……ごめん……仕事上の……本当に大事な人達で……どうしても……断れないんだ……」  
「……そう」

少しの沈黙の後、妻は言った。駄々をこねる

ことなどなく。

「…うん。わかりました。そういうことなら仕方ないですね。私のことなら大丈夫ですから、気にしないでください」

愛する妻は私に気を遣わせまいとして、とても晴れやかな口調で言うのだった。

「ごめん…本当に」

「そんな、いいですよ。あは♪でも、またきつと連れていってくださいね。今度また、きつと…。あなたと絶対デートしたいです」

「うん、わかった。…絶対に。それで…今日なんだけど、得意先の人達、ちよつとしつこい連中なんで、多分遅くなると思うんだ。十二時過ぎると思う。だから先に寝ててほしいんだ…」

「うん…わかりました。ゆっくり楽しんできてください」

「ごめん…本当にごめんな、藍子…レストランのキャンセルはしとくから…それじゃあ」



「はい」

夫婦の通話は終わった。藍子は最後まで、明るい声だった。けれど今モニターに映る、久しぶりのデートでオシャレを決めてきた彼女は、がつくりと肩を落とし、目に見えてしょんぼりしていた。そして途方に暮れた様子で、なんにもせずその場に立ち尽くしていた。

得意先云々と、深夜まで帰らないという設定は、向こうからの指示だ。それがナンパの成否に関わるのだという。夫の帰宅が遅いからナンパについていきやすいというのは、あまりに安直な発想だと思うのだが…。

やがて、モニターの中の妻は歩き出した。楽しみにしていた食事デートがなくなり、用もないからきつと家路につくのだろう。隠し撮りのカメラは遠くから彼女の様子を追いかける。するとその時、私は画面の端に、さつき動画で見た男の姿を発見した。動画と同じラフだがセン

スの良い服装をしている。あれは前もって撮影したもので、男は妻のすぐ近くで息を潜めていたのだろう。今更ながら気味が悪く、背筋が寒くなる感じがした。

男は繁華街を歩く妻と一定の距離を保ったまま、その背中を追い続ける。いきなり声をかけたのでは不自然すぎて怪しまれるから時間を置くのだと説明を受けていた。まるでストーリーのように妻を尾行する男。発端は私にあるのだが、不快で仕方なかった。胃がむせ返る嫌悪でいっぱいだった。

大通りの前。赤信号で妻は足を止めた。そしていよいよ、男が妻に接近する。獲物を狙うハンターよろしく、気づかれないように距離を詰める。

「…ゴクッ」

そして…。

「あの…すみません」

「…へ？…え？わ…私ですか？」

「はい。すみません。ちよつと道を尋ねたいんですけれど。いいですか？僕ちよつとこの辺初めて来たもんで、困っちゃってて…すみません、いいですか？迷惑じゃないですか？」

「ああ、いいですよ、全然」

妻は初対面の困っている男に、優しげな笑顔を浮かべた。と、そこで、モニターは突然真っ黒になった。

藤原が言う。

「中継は以上です。旦那様には今のナンパスタートから三時間、この場でお待ちいただきます」  
「…ゴクッ」

ナンパの経過については見せられないと前もって聞いていた。ここから先のことを、私はなにも知ることが出来ない。そして三時間後に目の前のカーテンが開かれる。その時マジックミラー越しの隣の部屋に妻の姿がなかったら

私の勝利。その場で賞金を手渡され解放される。逆にもし妻が連れ込まれていたら、ゲームオーバー。その後部屋で起きる全てが後にネットに晒されてしまう…。

三時間でお持ち帰り出来るか否か、口に出すのも忌々しいが、結局はそういうゲームだった。三時間という制限時間は私が選択したものだ。一時間か、二時間か、三時間か、挑戦者側が指定する。向こうに時間的猶予を与えれば与えるほど、賞金が増えるという寸法だった。制限時間が一時間なら、賞金は百万円。だが相手に三時間あげるなら、勝利時の獲得賞金は三百万円へと跳ね上がる。

私は迷わず三時間を選んでいた。何時間あるかと、妻が見知らぬ男にお持ち帰りなどされるわけがないからだ。そして三百万あれば、借金を一瞬で完済出来る。だが、当然その分より妻を危険に晒すことにもなる。下心丸出しのナン

パなら一瞬で拒絶して終了となるだろうが、どうせあの手この手でしつこくつきまといつてくるのだろう。また、妻への申し訳なさが膨れ上がる…。

「それでは、時間まで失礼致します」

藤原はそう告げて、部屋から出ていった。そして外側から鍵がかけられる。トイレはあるものの、これで私はこの密室から逃れられない。企画を途中で妨害されないための措置らしかった。

「……ふう」

一人になった不気味な部屋で、私は大きく息を吐いた。三時間待たねばならないが、逆にいうと三時間自由にしている。現在夜の六時。九時になれば、私は無事賞金をもらえることが確定している。だからひたすら、時間を潰せばいい。最近ハマっているスマホのゲームに没頭することにした。

「……………」

だが、全く集中出来ず、スマホの画面上で起きていることが頭に入ってこない。妻の身の心配もさることながら、私の頭の中に、ついにある考えが浮かんでしまったからだ。

もし万が一、いや、万が一はなくても億が一、兆が一…妻が……間違ってしまったとしたら？

「はあ…ああ…」

いきおい息が荒くなる。胸が痛くなる。呼吸が苦しくなる。それはほんの小さな思念だった。吹けば雲散霧消してしまうほどの。けれどこの状況で、わずかでもそれを思い浮かべてしまうこと自体が不味いのだ。そんなわけない。そんなことあるわけない。妻がナンパ男についていくなんてあるわけないじゃないか。わかっている。それはわかっているのに、どうしてもその小さな思念の存在を無視出来ない。消すことが

出来ない…。

「ああ…んん…」

突然だった。さっきまではなんだかんだで余裕を持っていたのに、この異常な密室状態に閉じ込められて、私は完全に平静を失っていた。ゲームをやめて動画を見てみた。音楽を聞いてみた。だがダメだった。なにをしても微かなノイズが消えない。心が安定しない。

私は観念してスマホをしまい、腕を組んで目を閉じた。地獄だった。無数の不穏な想念が頭の中を苛烈に流れ、私の精神を蝕んだ。さながら地獄巡りだった。これは私への罰だった。間違いない罰だった。私はその罰を甘んじて受けた。私は罰を受けねばならない人間だった。

「…お待たせ致しました」

やがて、部屋に藤原が戻ってきた。三時間経過したのだ。私はきつとげっそりとしていた。三時間どころか、十時間以上拷問を受けた気分

だった。

藤原に続いて、彼と同じ黒スーツ姿の屈強な男性が二人入ってくる。私の背後に間隔を空けて並んで立つ。彼等に関しての説明も受けていた。例えなにかあっても逃げ出すことが出来ないようにするための存在だという。

「それでは、間もなく規定の三時間を迎えますので、お話し致しました通りに進めさせていただきます」

そう断ってから藤原は準備を始めた。私も抵抗することなくそれを受け入れた。まず後ろに回した両手に手錠をかけられた。そして両足は足錠で椅子の前脚に縛りつけられた。これで私は逃げられない。立ち上がることさえ、手で目を塞ぐことさえ不可能だ。さらに耳にヘッドホンをつけられた。激しい音楽が大音量で流れている。間もなく約束の時間だ。向こうの思惑通りなら、男が隣の部屋に妻を連れて帰ってくる。



カーテンを開く前に、それらの物音が私に漏れ聞こえないようにしているのだった。

まるでナンパ成功を前提としているかの如き処置だが、決してそれが確定したわけではない。成功してしようと失敗してしようと、この演出はなされるのだ。直前までどちらかわからない状態にして、カーテンが開かれる。その時マジックミラーの向こうに誰もいないことも当然ある。その証拠に、藤原の傍らの台の上には、既に賞金の三百万円が現ナマで置いてあった。開かれたカーテンの向こうが無人ならば、これがそのまま私のものになる…。

「……………」

間もなく、運命の瞬間だった。いや、運命もクソもない。結果はわかりきっているのだから。うるさいだけの爆音に耳を晒しながら、私は懸命に心を落ち着かせようとする。大丈夫。絶対に大丈夫だ。あるわけない。そんなこと絶対に

あるわけがない。何度も何度も、念仏のように繰り返す…。

そして、その時が訪れる。

藤原が、私の耳からヘッドホンを外した。聴覚が通常に戻る。お持ち帰りに成功していれば、今、隣の部屋に妻と男がいることになる。藤原は男と連絡を取り合ってその辺はちゃんと確認しているはずだ。だが、なにも聞こえない。つまり隣室には誰もいないということだ。特殊な細工で、隣の部屋の物音のみこちらに筒抜けになる仕様になっている。なのになにも聞こえない。全く聞こえない。つまりは私の勝利……が。

「え…」

一瞬、音がした気がしたのだ。水音のような。いや、気のせいだ。もう聞こえない。なにも聞こえない。だから大丈夫だ。そんなことあるわけない。

「旦那様：お時間です。それでは、カーテンを開かせていただきます」

「……ゴクッ」

藤原が目の前カーテンに手をかけた。向この部屋からはただの大きな鏡。しかしこちらからはマジックミラーで向こうが見通せる。もし妻がいれば、妻からは私が見えず、しかし私からは妻が見える。藤原が手を動かす。カーテンが引かれる。ふわりと揺れて少し光が入る。誰もいない気がする。やっぱり大丈夫だった。私は一瞬安心する。

が。

「!!!!!!!!!!!!!!」

カーテンが完全に開かれ、マジックミラー越しに隣の部屋が一望される。そこには……